昭和二十五年十一月十五日発行（毎月一回十五日發行）（通第二十號）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

慈光

第二卷・第十一號

目次

歎異鈔第一・第六條……（1）
麗容の聖人……池山栄吉（2）
人生と信仰……福島政雄（7）
信味點滴……編者（13）

歎異鈔第一條

彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をば遂ぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつこころのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

彌陀の本願には、老少善惡の人をえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし。そのゆゑは、罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。

しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず念佛にまさるべき善なきゆゑに、惡をもおそるべからず彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆゑにと、云云。

仝上第六條

專修念佛のともがらのわが弟子、ひとの弟子といふ相論のさふらうらんこと、もてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人ももまゐらせさふらふ。そのゆゑは、わがはからひにて、ひとに念佛を申させさふらはばこそ、弟子にてもさふらはめ、ひとへに彌陀の御もよほしにあづかりて、念佛申しさふらふひとを、わが弟子と申すこと、きはめたる荒凉のことなり。つくべき緣あればともなひ、はなるべき緣あれば、はなるることのあるをも、師をそむきて、ひとにつれて念佛すれば、往生すべからざるものなんどいふこと不可說なり。如來よりたまはりたる信心を、わがもの顏にとりかへさんと申すにや。かへすがへすもあるべからざることなり。自然のことはりにあひかなはば、佛恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと、云云。

麗容の聖人

池山榮吉

新年の劈頭、例によつて岡山から二三の信友が訪ねて見えた。折から來合せた当地の數名の信友も一緒になつて、世間話や信仰談が賑やかに交されていたとき、私は突然岡山の人達にむかつて「どうです、あなた方は、親鸞聖人の上男振を拜見したことがありますか」と質問の矢を放つた。上男とは岡山の方言で美男といふ義、美男におはすといふ鎌倉の大佛は、岡山の人に言はせれば上男だ、一座の人は不意の奇問にあつけに取られた體であつたのは言ふまでもない。で、私はおもむろに次のやうに語り出した。

聖人の上男振、少し煽情的な言葉を択めば麗容の聖人、私は近頃このお姿を歎異鈔第六章で拜見することが出來た。すなはち「親鸞は弟子一人ももたず候」かう宜らせたまふ聖人の全貌に、言いやうのない崇高さ、しんとんとろりと見とれしめる或るものを感得する。

どうして私はにはかにそんな感じを抱かせられるやうになつたのか。それは一種の反動の致すところ、從つて或る対照としてであると言つても差支へない。

私が京都に住んでからこのかた、偉い人に接する機会は從來よりも多くなつた。そのせいといふわけでもなからうが、さうした偉い人々の中には、どうかするといやに偉さうにする——その限り親しみにくく、隔てをする——人も尠くない、といふことに、こないだ不図氣がついたのである。偉くもないのに偉さうにする人、それはむしろ憫笑すべく、お愛嬌だとも見られるが、相当偉い人が偉さうにするのは、それはまあ当然といへば当然、とがめるほどのことでもないかもしれないが、若しその人が偉さうにしなかつたなら、一層偉く賞はれるだらうにと思ふと、尠くともその人に取つては惜しいことと言はなくてはならない。

かう考へてくると、偉い人で偉がる人に接しやうが、若しくは偉くもないのに偉さうにする人に接しやうが、何も反感を抱くにも及ばないわけだが、たまたま反対に、偉いのに、偉がらない人に接したとしたら、心から頭の下る思ひがするのは自然である。

但しかうした人々に接する際、一つ注意しなくてはならないことは、人が偉さを鼻にかけてるなと認められるとき、自分は果してどうか、自分の方でも、いささかなりとも、はたまた無意識的にもせよ、偉さを外に現はしてはゐないかと反省することである。若し自分の方でいささかなりとも、はたまた無意識的にもせよ、実際さうしているとしたら、それこそ天狗の鼻の突き合はせで、相手が偉さの鼻をうごめかすのは自衛権の発動で、此方が鼻で隔てる以上、むかふも同じ態度に出るのは、五分と五分、当然のなりゆきと見るべく、非はむしろこつちにある。

同じ人でも或時は謙譲に、或時は高慢に見受けられることがあるのは、一つはその人のその時々の氣分にも由らうが、一つはこつちの態度如何に因つて挑発されることもあるのではないかと思はれる。ところで私などはつくづく考へてみると恥かしながらその挑発的因をいつも多分に持合はせている方である、と思ふにつけ、いよいよ臍め仰がれるのは、偉がらない偉い人である。

「親鸞弟子一人ももたず候」何たるあつさりした態度だらう。引出物として貰つた銀猫を、門を出るなりそこに遊んでいた子供に與へた西行の恬淡さが連想される。身も心も軽ろやかに、兎の毛のさきの塵ほども世間の慾心をとどめず、風々乎として羽化して登仙する概がある。

これは普通の意味でいふ謙譲の美徳の現はれではない。いつはらない信感そのものの発露である。聖人にして見れば、ただ自分の現に認めている信的事実の眞相、信的洞察をありのままに述べたに過ぎない。

さてその事実の眞相とは、聖人の宣教態度は、自分の智慧才覚でめずらしい教を説き聞かせるのではない、ただ取次ぎをするまでのことといふのである。何のことはない、まあ運動会の賞品授與係みたいなものだ。もし賞品は授與係が個人として呉れるのだと思ふ人があつたとしたら、授與係は迷惑に感じるだらう。賞品を出すのは、通例学校なり團体なり、主催者で、授與係は自腹を切つたのでもなければ、自腹を切りながら、学校なり團体なりが出したやうに見せ掛けるのでもない、ただ取次ぐ役をするだけのことだからである。

月に向つてその光を讃へる人があるとして、若しお月様が人並に己惚のつよいわからず屋であるとすれば、偉さうな顔をするだらうが、お月様に自らを知る明があるとすれば、御冗談でせう。この光は私のではありませんよ、太陽のを反射してるだけなんですよ、あなたの御ほめ詞は御間違ひですとほめられたのを恥しいとさへ思ふだらう。

今聖人がそれである。自分にありもしない価値をありとみなす、それはうぬぼれである。ある価値をひめて無いもののやうに振舞ふ、それは謙遜である。今問題となつてる聖人の態度は、二者の中どちらでもない、無いものを無いと言明してゐられるだけのことである。「先生といはれるほどの馬鹿でなし」聖人は甘んじて先生といはれるには、餘りに事の眞相に徹してゐた。

東京の郊外に――たしか目黒あたりだつたかと記憶するが――萬公と呼ぶ犬がゐた。近所の川端に子供達の遊び場がある。萬公もそこへ出掛けるのを日課にしてゐた。子供達はときどき萬公を相手に、木の片や竹の端を川の中に投げてやる。すると萬公は待つてたとばかり飛び込んで、泳いでそれをくはへて來るのを得意の芸当としてゐた。

或日けたたましいわめき、「芳ちやんが落つこちた」と子供達のかんばしつた叫びに、萬公首を上げて川の方を見やると木の片ではない、小つちやい女の子が流れて來た。萬公何と思つたか、いきなり例のやうにざんぶと飛び込んで、泳いで行つて、女の子の帶際をくはへて岸の方へ引張つて來た。子供達も、そのうちに駆け付けて來た大人達も「あれあれ萬公が芳ちやんを助けた」とわいわい言つて、どつと押し寄せて來た。人々は芳ちやんを介抱して、幸に命に別條のないのをたしかめて、さて萬公はと見ると、何処にも居ない。萬公は人々がどつと押し寄せてくる氣配に怯えたものか、一散に我が家に舞ひ戻つて、小屋の前に寢そべつて、きよとんとして居たのであつた。

洒々落々、無我といはうか、無心といはうか、岫を出る雲のやうな萬公の心事、聖人のそれによく似てゐるではないか、世俗に抱泥せず、人間離れのしているといふ点で。

「親鸞は弟子一人ももたず候」聖人はここでも親鸞と名乗つて――かうした場合いつも決つたやうに――自家直接の信的体験を吐露されてゐる。それはもとより単なる推理の歸結ではない。例へば善導大師の眞佛弟子釈の中に「弟子とは釈迦諸佛の弟子なり」とある。それを前提として、親鸞は釈迦諸佛に非ず、故に弟子一人ももたずと結論するのは、あやまりではないが、単なる論理的推断にしか過ぎない。そんなことは学究のすることである。さうではなくて、「信心をうることは、釈迦彌陀十方諸佛の御方便よりたまはりたるとしるべし」といふ確固不拔の心証の反面と聞こえる。それがまた他面、教理演繹の結果とぴつたり出合ふ。そこが聖人一流の凄いところである。

「弟子一人ももたず」とは、これを聖人の口から聞くとすると、頗る逆説である。なぜなれば、弟子が無いとは、普通の意味に於いて沢山の弟子もあり、師的活動の旺盛な人の言として、始めて何等かの意味がある。すこしも師たる働をしない人に弟子のないのは分りきつたことだからである。ところで聖人にして見れば、日頃如來の教法の宣揚に餘念もない。無論お弟子も沢山ある。だから一応逆説も甚しいと聞こえるのであるが、一切を如來廻向に歸納する聖人独特の諦忍

の上から言はうなら、さう言ふのが独り本当で、さう言はないのは皆うそである。

しかしかうしたことは、先生といはれて氣をよくする世の中では、なかなか平氣で言ひ放てるものではない。それは如來に親炙した人、如來の慈悲に腹ふくれた人、如來の光明に触れて身心柔軟になりきつた人にして始めて言へるのである。

「佛の威光を蒙つて照触せらるるもの、身心安樂にして人天に超過せん」今その光が、この声明に於いて、燦として聖人の上に射してゐる。雨上りに水蒸氣が日の光を受けて、鮮やかに虹と影現するやうに、如來の超日月光に淨化された姿ほど、いみじく神々しいものはない。清らか朗か躍かなど、凡そ明るい美しさから採つたと思はれる形容詞は、どれもこの姿を飾るに持つて來いである。この姿こそ光そのものの映象化したものとうなづかれる所以である。

かういふと餘りに大形にきこえるかもしれないが、佛德の諸相、例へば「欲覚・瞋覚・害覚を生ぜず、欲想・瞋想・害想を起さず、色声・香味・触の法に着せず、忍力成就して衆苦をはからず、小欲知足にして染恚痴なし、三昧常寂にして智惠無碍なり、虚偽・諂曲の心あることなし云々」とある所謂法藏因位の修行の如きにしても、その片鱗が聖人のこの声明を通して、ちらりちらりとひらめくやうに感じられるのは私一人に限つたことであらうか。

弟子もたずの声明が逆説に聞こへるやうに、丁度その正反対に「いやしくも眞宗の流れを汲むもの、一人として聖人の弟子でないものはない」と主張したら、矢張り逆説に響くであらうか。然し弟子一人もたずの声明が、奇矯に聞こえながら眞実であると同じやうに、皆弟子の主張も、れつきとした根拠のある眞実である。なぜなら、弟子をもたない聖人は「如來の教法を十方衆生にときかしむるときは、ただ如來の御代官をまふしつるばかりなり、さらに親鸞めずらしき法をひろめず、如來の教法をわれも信じ、人にも教へきかしむるばかりなり、そのほか何を教へて弟子といはんぞ」といふ立場にあらせられるのだから、成程個人としては一人の弟子ももたない代りに、如來の代表としては、直接間接に聖人の教化に浴するもの、一人残らず弟子だと言はなくてはならない、しかもこれまた単にさうあるのが理の当然といふだけでなく、いやしくも絶対他力の信念に生きる者、一人として聖人を師と仰がないものはない。それがしみじみと感じられる事実なのだから妙である。

「如來の教法をわれも信じ、人にも教へきかしむるばかり」一人も弟子をもたない人が、教行信証を書く、文類をかく、和讃を残される。その他それからそれと、八十、九十まで筆を採つてやまないのは、畢竟これがためである。如來の

教法を十分衆生に聞かせたくて、聞かせたくてたまらないからである。

「わたしは、わたしの智慧に腹ふくれた、集めた蜜の多きに過ぎる蜜蜂のやうに、欲しいと差し出す手が欲しい。わたしは施したい、頒ちたい。世の賢いものもやがてその愚さを、貧しいものもやがてその豊かさを喜べるまでに」山に入つて十年の修行を積んで、再び人界に下らうと、山を出るツァラトウストラはかう叫んだ。聖人が師の許で過した六年の間に、蜜蜂がせつせと蜜を貯めるやうに、腹ふくるるまで蓄へた法悦を、辺鄙の群類に頒ち施すべく、配所の旅に出られて以來、田舎に、都に紙布九十年の生活は、ただ如來の御代官としての使命を、力限り根限り、果したさの精進に外ならない。

かくて一方に倦むことなき忍力を発揮しながら、他方、すこしも悪あがきをする風の見えないところが、また聖人の特徴の一つである。さうした態度もつまるところ「弟子一人ももたず」裏返して言へば「彌陀の御催しにあづかりて念佛まふし候ひと」といふ信念がさうさせるので、歎異鈔第二章の末尾に「この上は念佛をとりて信じ奉らんとも、また捨てんとも面々の御はからひなり」と、あつさり切上げることの出來るのも、全くかうした道理に基づくものとうなずける。

最後に「念佛一つだつて、ひとに申させることの出來る私なもんですか」と、我関せず焉と澄まし返つてる聖人を、湯上り姿の聖人と見上げまつることも出來やうと思う。湯は阿彌陀湯である。別に超日月光の光浴やら、阿闍世のための月愛三昧浴やらの設備もある。そこですつかり温たまつて、綺麗さつぱり垢を落して、やれやれと風呂場から出て、浴衣がけで團扇の風を入れてる風情だ。

私は非常に身体を倦るがる性分で、時々倦るくて倦るくてどうにも仕様のないことがある。ところが私は湯が好きである。湯には入らない日は殆どない。で、湯から上つて、一ぷくする段になると、ふとああ好い氣持だなと、自から氣附くことがある。あの私を苦しめた倦さが、何処かへ行づて了つてゐる。そんな筈はない、どこかにまだ隠れてゐるんだらうと、ぢつと思ひを潜めてみるが、どこにも見当らない。その時の心地よさ。

阿彌陀湯の效目で、何とも言へないのんびりした好い心地になつて、身心悦予の境から、うつとりと独語のやうに仰せ出されたのが、「親鸞は弟子一人ももたず候」の朗らかな宣言である。

終に臨んでなほ一言する。「是非しらず、邪正もわからぬこの身なり、小慈小悲もなけれども、名利に人師このむなり」とあるが「名利に人師をこのむ」といふことは「弟子一人ももたず」といふことと正面衝突をするかに見へる。が、

必ずしもさうでない。人師としての振舞を、名利欲の発動として自認する、その時すでにまた湯につかつてゐる。例の阿彌陀湯にね。さうして名利の汗を洗ひ流して、人師のうぬぼれが清算される一方、弟子もたずの謙虚な諦忍が一段とはつきり浮び上つてくる。その結果、更に教人信への念願の自然な展開がおこされるやうになるのは、これまた大なる餘慶である。

（後記）十一月七日は池山先生十三回忌に当りますので、御遺稿を頂きました。先生は歎異鈔から産れ出られた方であつた、歎異鈔の中に秘められた無尽の宝を掘り出されては有縁の人々に頒たれることを唯一の生命とされた。本稿もその一つである。聖教を読み、解釈し、人に話すことは割合に容易であるが聖語の一言一句が身につき、身体化することが至難であるが一番大切な問題である。池山先生の歎異鈔の讃仰はそのまま人格化されたものであつたことを附言する。

人生と信仰（一）

福島政雄

私がどのやうにして親鸞聖人の教に目が醒めたかと言ふことから御話して行き度いと思ひます。今から三十六年程前になりますが、私の二十六歳の夏七月十一日であります。

私はもともと眞宗の門徒ではありません。先祖は眞宗でしたがどうしたことか禪宗の壇徒になつて居ました。然し禪の事を聞きもせず、參禪もせず、全く佛縁もなくして少年期を過して來ました。

私が佛教にふれました抑々の初めは、日蓮上人でありました。十九か廿歳の頃、当時の文学青年たちが皆耽読して居りました高山樗牛の晩年の作に「況後錄」と言ふのがあります。それは日蓮上人が佐渡の島に流された時のもので、その初めは「伊東に死なず、龍の口に斬られず、不思議にながらへしいのちも今佐渡が島を最後の地と覚ゆるぞ」と言ふ、力強い文章で一時はこの況後錄を終りまで暗記して居た程でした。

大学に入りましてからは日蓮上人の御遺文集を求めたりして段々に日蓮上人に深く入つて行きました。一方また私はキリスト教にも関心をもち、十八、九歳頃から聖書の中のマタイ傳など読み、その中でも有名な「山上の垂訓」なども感動をもつて読みました。か様に日蓮上人の御遺文とキリスト教の教訓が私の宗教に触れた最初のものであります。

又大学生の頃、親友のお父さんの一週忌に二、三の友と同室に集ひ、晩餐を共にした時に、友人から多田鼎先生著の「恩寵の宗教」を施本として頂きました。それで始めて親鸞聖人がどういふ御方であるかを少し知り始めたのであります。

すると学生の時の私は、キリスト教にも、日蓮上人の教にも感激し、そして親鸞聖人にも親しむやうになり、つまり此の三人の宗教家が私の心の中に三ツ巴となつて動いてゐましたが、そのいづれの信仰にも入つたのでありません。

かうして学生生活を終つたのが二十四歳の七月です。それから、これも深い印象をうけて忘れられませんが、私共の東大の卒業式に明治天皇の最後の行幸を仰ぎました。卒業式が七月十日で、七月三十日に崩御遊ばされたのであります。

私の二十五歳の時、女学校に出始め英語など教へました。最初は得意でしたが一年経たないうちに「自分は教育者として他の先生よりも大いに熱心にやつてゐる。それに生徒の方からは一向に自分に共鳴してくれない」といふ淋しさを心中に感ずるやうになりました。この頃ですが、私の叔母が子供の教育の事で大変煩悶して東京に參りましたので、叔母を訪ねますと「小供の教育上いろいろな問題があつて親類や知人の処へ相談したが、誰も親身になつてくれない。つくづく人間が嫌になつた。人間はもう相手にすまい。然しこれでは淋しいから、今後は佛様を相手に暮したいから一つ信仰上の話を聞き度い。私の母は淨土宗の篤信者であつたから、私も母と同様な信仰に入りたい。広い東京だから信仰上の話をして下さる人があらうから善い方をさがしてそのお話をききに連れて行つてくれ」と頼まれました。私は先に多田先生の著書をくれた友人から、「本郷森川町の求道学舎で近角常観先生が日曜講話をして下さるから、共に行かないか」と誘はれて居ましたが、当時の私は親鸞聖人は知り始めていましたが、「念佛は白髪頭のお爺さん、お婆さんにはよからうが、自分の様に若い、しかも大学教育をうけた者が」などと思ひあがつてゐましたので、一向に友人の誘ひをききませんでしたが叔母を案内する氣になり、三月二十二日に青山七丁目の家から叔母を連れ、帝大正門前で下車し、かねて打ち合せてあつた友人に「叔母を頼む、自分は聞かない」といつて帰らうとすると、友人が憤つた様に「切角ここまで來たのだからだまされたと思つて聞いてゆけ」と言ひましたので、渋々聞いたのであります。

その時の御講話は、当日が丁度聖德太子の御命日であり、太子が晩年常に御側付の人々に申された「世間虚仮、唯佛是眞」を講題とされて、朝八時半から正午まで三、四時間もブツ続けの御話でした。其御話を肝心の叔母は余り感銘がなくしぶしぶついて行つた私が返つて感激しましたのです。

私は先づ世間虚仮の御話に胸をさされました。教育者として教育愛をもつて生徒を愛して來たのに、むかうは一向に感じてくれないと淋しさを感じてゐた私に「私達は暖い心を持つてゐるだらうか、実は私達の心は五分五分根性の冷いものだ」と言ふ事を諄々として説かれました。

即ち、「私達は、五分よく思はれると、五分よく思つてやる。五分悪く思はれると五分悪く思ふ。人に親切にして貰へば親切で返すが、不親切にされると不親切で返すのが普通である。時には私達にも殊勝な心を起してあくまで人には不親切で返されても、親切にしてやらうと思ふことがあるが、然しいざ始めてみると、こちらがこれだけ親切を尽くしても、相手はそれを微塵も感じてくれぬとなると不足を感じ出し、こちらの心は退轉する。これ程までに尽くして居るのに先方では感じて呉れないかと不満になる。この一点の不満の感はすべてを破壊する。この心が九十九の親切心の中に一点でも起ると、それまでに尽くした親切は嘘になる。無になる。即ち私達には眞実心といふものは本來皆無であつたといふことがわかるのである。私達は自分の心が温いつもりで居るけれども、眞底を割れば自分の心は冷いものだとわかる」といふお話でありました。

これが身に沁みまして自分が温い心の持主であると思ひあがつて居たことが傲慢にすぎなかつたと針で胸を刺されるやうに思ひ、涙さへ浮びました。

歎異抄の中に「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのことみなもて、そらことたわごとまことあることなきに、ただ念佛のみぞまことにておはします」とありますが、この中で「まことあることなき」までは解りましたが「念佛のみぞまことにておはします」がなかなかわかりませんでした。

「よろづのことそらごと、たわごと、まことあることなきに」と知らされて、私の心の暖さを信じて居た自分の立ち場を壊されてしまひ、胸の底から苦しみが湧き出て來ました。

その時から求道学舎に通つて、先生の御話を承りましたが「念佛のみぞまことにておはします」が、どうしてもわかりません。四、五、六月と心が変になつて來て、女学校に勤務してゐたのですが、生徒達にもの懐しい調子で先生と呼ばれると從前とは反対に、私の心がこんなに冷いのに、さう言ふ風に言はれる筈はないと思ふやうになつて來て、相手を隔てそして段々淋しくなつて來ました。二河喩にありますやうに冬枯の人影も見えない淋しい広野にさしかかつたといふのがこの頃であつたと思ひます。空は一面に灰色の雲に覆はれ、その雲の下、荒野を一足一足辿つて行く姿であつたのです。心の中までその灰色の雲にひたされた氣持です。だんだんと人生が面白くなくなり、自分が頼りにならなくなりました。

丁度その頃、六月でしたが私は、徴兵検査を受けに郷里の熊本に帰りました。検査の結果は第二乙種でしたが、その時父親が改まつて私を前に坐らせて「お前も結婚させやうと思ふがどう思ふか」と訊きました。私は前述の様なひがみ心で一杯でしたから、素直に受け容れられないのです。父はその

時、現在の私より若い五十七、八でしたが、頭の白くなりかかつた父親に私の心が解るものかと思ひ、まるで本心が打ち明けられず、心中では反抗心をもつて、沈默の反抗を続け何の答もしないでそのまま東京に帰りました。

東海道線で帰る汽車から富士が非常に美しく見えました。汽車の窓で近角先生の「人生と信仰」といふ著書を続みながら、美しい富士を仰ぎ見ましても、その著書に「世界宇宙と信仰」の項で、「世の中のどんな美しいものも、総て移り変る、萬物は無常流轉する」とあるのを思ひ浮べると、ひがみ心が起つて來て、この富士も永遠なものでなく何時かは移り変つてしまふのだと思ふと、素直に美しいと思へなくなり、ひがみ心だけで東京に帰りました。

両親にも自分の心を打ち明けられぬといふ苦しみ、学校でも同僚や生徒に対して隔て心のある苦しみなど、いくつもの苦しみの塊が心の中にある様な氣持がしました。

七月に氷道学舎で夏季求道会が開かれました。その時全国から先生の御育てを受けられた熱心な人達が集り、午前中は御講話、午後は信仰上の打ち明け話があるといふわけで、私も五、六回続けてお話を聞きに行きました。その時は教行信証の信巻、阿闍世王入信の処を、毎日先生が熱心にお話になりました。そのお話を承はつてゐるうちに、胸の中に五つ六つあつた苦しみの塊が消えて行きました。

七月十一日、御講話の終りの日、私に近角先生の教をきくやうにと勧めて呉れた友人が九州に帰るのを見送つて、代々木の御料地の裏道を下宿の方へ辿つて行くと、もう陽は沈んで、星が美しく輝く夜になつて居ましたが、その時自分の心持が変つてゐるのに氣が付きました。下宿に落ち着くと自然に南無阿彌陀佛を唱へずには居られなくなりました。

幼い時から全然したしむこともなく、むしろ念佛を軽蔑して居た私が、不思議に称名せずには居られなくなり、心の澄み渡る感がいたしました。

翌日浅草の報恩寺に先生に伴つて参りました。私が本堂の前で手を合はせたのはこのときが始めであります。その時の氣持は私の心によく残つて居ります。

この時から、キリスト教にも、日蓮上人の教にも入れなかつた私が、親鸞聖人へ目が開かれました。

「廻心といふことただ一度あるべし」と歎異抄にありますが、私はその後一週間程は何を見ても法悦を覚え、松の枝に鳴く蜩の声を聞いても、この上ない美しい音楽とひびきました。此頃が人生の苦悩を越えて信仰に入うた第一歩でありました。ところがかうなると歎異抄を読んでみると一度によく解るやうになつたのです。実は友人に勧められて一年程前眞宗聖典を求めましたが、何処を開いても何もわからなかつたのですが、近角先生のお蔭で心持が開けかかると一度にわかるやうになつたのです。勿論一言一言の細かいことまで解るやうになつたのではないのですが、開巻第一の

「彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて往生を遂ぐるなりと信じて、念佛申さんと思ひ立つ心のおこる時、即ち摂取

不捨の利益にあづけしめ給ふなり」

などことに胸にピンと應へるやうになつて來たのです。要所要所が、はつきりと胸にひびく樣になつたのです。又眞宗聖典が歎異抄からハツキリわかりはじめましたのです。

教行信証の「誠に知んぬ。悲哉、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して定聚の数に入ることをよろこばず、眞証の証に近づくことを樂しまず、恥づべしいたむべし。」

の御語が初めて身に沁みました。一週間程は斯ういふ法悦狀態が続き、その夏は樂しく過しました。ところが結婚問題などが続いておこりまして、法悦にひたつて居ても実際問題はカラリと解けません。

その秋でした。私は急性盲腸炎で切開手術を受け、四週間入院し、痛みが薄らぐと病床で眞宗聖典をとも角始めから終りまで読み通し、又清沢全集を友人が持つて來て呉れたのでそれも読みました。

退院してから私は結婚問題でも親に殊勝な心持を持つて來ましたが、併し又ともすると反抗的になりました。親の方では嬉しい手紙が來るかと思ふと今度は身投げでもしさうな手紙が來るので、どうなることかと心配して居たさうです。

その翌年の三月、母が家事を妹に托して上京して來ました。私の生れる一年程前に一人息子だつた兄が死に、次に生れた私が男の子だつたので、私は母に特に大事に育てられては非常に女に迷ひ易い性で、母は早くからそれが分つて居たやうです。私が十七、八歳の頃から「この世で一番恐ろしいものは女だ」と繰り返して私に言ひ聞かせました。弟はそんなに言はれて居ませんから、母はよく私を知つて居たと思ひます。実際母の言つた通りです。結婚前にも心を迷はせた女があつたのですが、それを母に言ふことが出來る樣になつた。母は「お前はその女に大分執着があるやうだが、本当にその女と結婚したいのなら親子の縁を切らう」といふ話でやうやくその女との結婚を思ひきり、母の五ヶ月の滞在で別に私の結婚をきめてくれました。

私が親鸞聖人の御教に目醒めてから、私の信仰生活は頭で取けとつたものではなく、教育問題に苦しんだり、母に反逆したり、煩悩にからんで居る信仰生活でしたから、歎異抄が胸に食ひ込んで來ました。

「彌陀の本願には老少善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし。その故は罪悪深重、煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆゑに、悪をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆゑに」

の第一章が眞直ぐに私の生命に響いたのです。「彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて往生をば逐ぐるなりと信じて、念佛申さんと思ひ立つ心のおこるとき、すなはち攝取不

來たのです。その母が三百里もわざわざ私の爲に上京してくれたので喜ばなくてはならぬ筈ですが、少しも嬉しくありません。前年の七月信仰を獲ましても母に対して隔て心を持つてゐましたから、自分の心をハツキリと打ち開けず、母が參りまして一週間になりましても、母にも心を打ち開けるでもなく、母を避けて友達の処へ行つたりなどしてゐましたが、三月十一日でした。その夜も十二時近くに友人のところから帰つて見ると母は休んでゐました。隣の部屋に御厨子があり近角先生の書いて下さつた第名号があります。それを拜み、眞宗聖典をいいかげんに開けると、そこが大経の五悪段の第五の悪のところでした。

第五の悪といふは「この世にはよくない人が居て、家業に精を出さずなまけてゐるので一家は食にも困るやうになる。親が見るに見かねて精出して働くやうに言ふと、子は目をいからせて口答へする。斯う言ふ子は親子といへども敵のやうなもので、こんな子は無い方がよい」と言ふのであります。

そこを読んで、これは私のことを言つてあるのだと始めて氣がつきました。私は佛壇に泣き伏しました。その時本当にハツキリと如何にも浅間しい自分の姿が見えると泣かずにはゐられませんでした。機の深信、法の深信とありますが、私は法の深信は二十六歳の夏から、機の深信は半年後の二十七歳の三月から自覚しましたと思はれますのです。

かうなると不思議にも翌日から母への隔て心がなくなつて腹にあることが言へる樣になりました。恥しいことですが私捨の利益にあづけしめたまふなり」といふ心がよくわかります。「すなはち」といふのがそこについてはなれないと言ふ意味なのがよくわかります。

二十六歳の夏に至るまでの苦しみに、自分の煩悩の姿にそろそろ氣付き始め、二十七歳の三月になるとそれがハツキリとわかつて來ました。この頃から機の深信が自覚せられ始めましたが、問題はそれで終つたのではありません。それ以來三十年間ますます深くなつて來ます。

私が三十一歳の時、女の子が疫痢で急死しました。その頃私は仙台に住んでゐましたが、二十時間ばかりの煩いで忽然と死んで行きました。この子が死んでから始めの三年位は同じ年頃の子供を見ると、いつも思ひ出しては悲しんだものです。葬式の時本願寺別院の老僧の方が「人間の誠は続きません、程なくさめて來ます」と言はれましたが、ひどいことを言ふと思ひましたが、その通りでだんだん薄れて來ました。今になりますと、生きてゐたら三十五になるなどと育つた姿を思ふやうになりました。その子供の最後の言葉は、今でも忘れませんが「早くお家へ帰りませう」と言ふので、家内が「ここが和ちやんのお家なの」と言ふと「いいえ、さうでないの、すぐお家へ帰りませう」と申しました。私は此の時からお浄土といふものがハツキリ知らされて來ました。二年八ヶ月の子供の生涯が私にお浄土を知らせるために授けられたものだと考へて居ります。

同じ年の六月に近角先生の御子さんもなくなられました。

先生はその時、仙台で御講話をせられ、私の家にお泊りになりましたが、その時「何となくお経を読んでおかうか」とおつしやつて、読経をして下さいました。そして、近角先生は「信仰の徹底と人生と彼岸との交渉」と題して、人生と彼岸とはこの世を去つたものによつてつながれたといふ意味のお話をして下さいました。

かく子供の急逝によりまして人生と無常を痛切に感じるやうになつたのです。私の若い頃祖父母がなくなりましたが、その時は別に感じもしませんでした。ところが親として子供を失ふとなると痛切です。しかも翌年三十二歳の一月に妹が死に、一週間あと一月十九日に母もなくなりました。それから非常に人生の無常を感じ、大無量壽経の「独生独死、独去独來」といふ悲歎が自分の現実の問題となつて映つて來ました。

かくの如くして漸やく人生不幸にひどく打たれ、それとともに御称名が自分の生命の問願となつて來ました。その間終始一貫して続いたものはみ佛のおまことです。近角先生も常に「佛はまことの塊りである、佛のまことは我々にとどくのだ」と仰言いましたが、歎異抄の第一章はこのことをいつてゐられるのです。佛様がむかうからとどけて下さる。こちらは不徹底で愛欲なり無常なりに迷つて居る。その自分に佛の御声が響く、そして念佛申さんとする心がおこります。私としてはこの心は二十六歳の時からおこされてゐますが、常に新しい心持で味はつて居ります。私が迷へば迷ふほど無限のまことが響いて來る。從つていつも新しい念佛申さんとする心がおこつて來るわけであります。

以上私の体験を申して歎異抄第一章の氣持をお話したつもりであります。

昭和二十五、七、十三、

於愛知縣知多郡榎戸法通寺（午前講話）

信味點滴

編者

親が子に絵本を買つて下さる。然し絵本を下さる前に、絵の内容がわかるまでにすでに親は子をはぐくみ育てて居て下さる。買つて下さる親の恩もさることながら、買つて下さる絵本を読み楽しめるまでに育て上げて下された御恩は測り知ることが出來ない。

○

白井先生御來慰下された時のお話に、

「求道会館で夏期講習会が行はれた頃、午前中は常観先生の御法話、午後は座談会であつた。会が終つた日、先生の御伴をして浅草の報恩寺にお参りして御眞筆の教行信証を拝ませて頂いた。その時一人の老婆の信心篤い方が、一寸拝んでは顔をそむけて涙をふき、一寸拝んでは顔をそむけて涙をふいて居られた。チツト拝んで居るとハラリ落ちる涙で御本を汚すからです。

嗚呼あれがほんとうに御聖教を戴く人の心でせう」と申されてしづかに念佛してをられた。

○

親から頂いた絵本をよいのわるいの、わかるのわからぬのと言ふのが小供の常であるが、絵本を見得るまでに慈育して下された無量の御恩は忘れ勝ちである。

○

「闇の夜に鳴かぬ烏の声きけばうまれぬさきの父ぞこひしき」といふ古歌がある。「闇の夜」とは私の無明の心である。「鳴かぬ烏の声」とは西岸上の声である。如來招喚の勅命である、南無阿彌陀佛と名告り出て下さる声である。「生れぬさきの父」とは測り知ることの出來ぬ前から今現在に到るまで御慈育下さる親である。「恋しき」とはその久遠の親と遠く深い血のつながりを感得することである。

○

子の母を思ふ如くにて、衆生佛を憶すれば、現前当來とほからず、如來を拝見疑はず。

池山先生遺詠

われならぬ清らのわれのわれにありて
　　穢悪のわれをわれにしらしむ

よきひとのおほせにききて御名をよべば
　　よばはせたまふ御声きこえぬ

たのまるるただ念佛のわれにあり
　　さるべき業はさもあらばあれ

慘怛たる悔ひの残せし一一の
　　あとかたもなき無碍の一道

わが庭の萩さかりなりここかしこ
　　白き孔雀のむれゐるがごと

編集後記

去る九月の彼岸の中日、ラジオ放送に佛教のブの字もなかつた。ラジオは世間の要求の多いものを放送するのであるから、世間の佛教への関心が消失してゐることを明らかに示して呉れた。

大本山は各所に高く聳えてゐる。村々には高い屋根の寺院が隨所にあるが、何處に佛教の流れがあるのか、嘗て支那に朝鮮に伽藍だけを残した佛教が、また日本もさうなるのであらうか。

山を下る水は、自らのもつ水勢で谷川を作つて流れ下るが、平地に出ると低い處を逼つて延蜿曲折して海に入る。然し年月が經るにつれて、年々歳々河上から流される土砂が低地を埋めて川底が平地より高くなる。人々は堤を補修して行くが、遂には大洪水の日に堤は破壊せられて水は低き地を走る。古い河には推高い土砂が残り、渇を潤ほす水は一滴もなくなる。

これは一つの自然現象であるが、人類三千年の歴史に於て、既成宗教も亦斯うした鉄則の支配下にある。そこに宗教の革新が五百年千年の期間をおいて自然に必要となる。

水が無くなることは決して無いが、水の在り場が大切な問題である。「人は上り上つて落ち場を知らぬ」と蓮如上人が警告されてゐる。「上り上つてやまぬ」心を自照せしめられ、「落ち場」を知らされるところ法水満々たるを惠まれ、生々活潑な天地が自づと拓かれよう。これは獨り既成宗教の問題でなく、我等の日々の問題である。

◎

△「匿容の聖人」は在りし日の池山先生が満面に微笑を湛へながら「槍の構左は美男で御座る、油壺から出たやうな男、しんとんとろりと見とれる男」を引かれながら聖人の匿容を讃仰された時の原稿である。今月七日の先生の十三回忌を一道会館に迎へ、謹んで御遺稿を記載させて頂きました。

△「人生と信仰」は福島先生の本年八月知多郡鬼崎村の法通寺での御法話の速記であります。同寺松本虚舟師の御骨折りを厚く感謝して居ります。又福島先生には御法縁を終へて御皈宅後数日にして御息女の御病死と承つて居ります。御多難御多忙の中にも原稿を補正して頂き、尚話し足らなかつたからとて「善人悪人」の原稿も添へて下さいました。次回は午後の御法話、新年号に「善人悪人」の稿を記載させて頂きます。先生の御住所は横須賀市田浦局区内船越六六二番地であります。

◎

前月号に前金切の御知らせを致しましたがつい間違ひました御方もあり御迷惑おかけ致しました。御心着の方は御申越を願ひます。

花田記

昭和二十五年十一月十日印刷
昭和二十五年十一月十五日發行
毎月一回十五日發行
定價　一部金拾五円（郵税共）
一年分金百八拾円（郵税共）

名古屋市南区駈上町二ノ二八
編集兼發行人　花田正夫
名古屋市千種區千種町馬走二八
印刷人　本田政雄
名古屋市千種區千種町馬走二八
印刷所　千草印刷所
名古屋市南区駈上町二ノ二八
一道会館
發行所　慈光社
振替口座番號　名古屋一〇四七〇番

慈光第二卷第十一號　昭和二十五年十一月十五日發行（毎月一回十五日發行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可